

## 第18回歴史地震研究会に参加して

文化庁文化財部美術学芸課\* 田良島 哲

Impression Report of 18<sup>th</sup> General Meeting

Satoshi TARASHIMA

Agency for Cultural Affairs, 3-2-2, Kasumigaseki, Chiyoda  
Tokyo, 100-8959 Japan

### § 1. はじめに

秋田県象潟町を会場に9月7日から9日の日程で開催された第18回歴史地震研究会のうち、7日と8日の研究発表会及び懇親会に参加させていただいた。私は1998年からmusha メーリングリストに参加しているが、歴史地震研究会への参加は今回が初めてである。ふだんEメールを通じてその人となりを想像している方々にお目にかかり、研究成果を聞けるということで、期待しながら、朝の秋田新幹線に乗った。

### § 2. 研究発表会の印象

象潟に着いたのは午後2時頃だったので、研究発表会も全部参加できたわけではない。実際に聞くことができた発表は、両日合わせて25本程度だったが、まず報告内容の多彩さに圧倒された。

取り扱われている史料についても古記録・絵画・新聞記事など地震研究者の関心の広さを感じられたが、一方で、歴史研究者の目から見ると信頼度の面からむずかしい史料もあり、これから率直な議論が必要だと思う点もあった。

報告を聞いた中で、いくつかの点が印象に残った。

一つは、自然による生成物もりっぱな「史料」だということである。いくつかの報告を聞いて、歴史時代の研究でも、自然科学的な分析の成果を理解することが必須になりつつあることを実感させられた。個人的に興味深かったのは、平川一臣氏の報告で、土壤と津波堆積物を丹念に見分けながら、イベント発生の季節や津波のふるまいまでを特定してゆく作業には、驚かされた。もっとも、懇親会の席で報告者に、「こういう緻密な観察は常識なんでしょうか」とうかがってみたところ、「まだ少数派です」というお答えで、どの学

問分野も「原史料」を取り扱うことはむずかしいものなのだな、と思った。

また、武村雅之氏の関東大震災の震度分布に関する報告や加藤祐三氏による沖縄におけるチリ津波の実態報告のように、比較的最近の地震や津波でも歴史学的な手法に基づいた研究が重要になっているということも当然のこととは言え、再認識させられた。これまで古記録や古文書を対象にしていた歴史地震研究も、近代の行政文書や新聞・雑誌、個人の日記、さらに体験者からの聞き取りなどを守備範囲にする必要が出てくるわけで、今後、この時代の研究者や記録史料の保存を専門にするアーキビストとの協力も図ってゆかなければならぬと強く感じた。

理工系の研究者にとっては当然のことであろうが、歴史研究者にとって目新しいのが「モデルの検証」という作業である。条件を組み合わせてモデルを作り、シミュレーションを行って事実関係を推定するという報告がいくつかあったが、歴史学では使わない論理構成である。歴史上の事実を計算で推定することが(結果が妥当かは別として)許される、というのは正直言つてうらやましい。

その一方で、モデルの構築に際して、文献史料を援用する場合には、文献自体の解釈が適切だろうかという問題を伴う。今回の研究発表会の報告では、大きく論旨を損なうような史料の解釈の誤りはなかったよう思うが、歴史研究者としては、史料を提示する際に、それぞれの史料の特質と信頼性について十分説明することが大事だと思った。

少し不満に感じられたのは、報告時間である。1報告15分はやや物足りない。報告の本数を絞っても、1報告の時間をもう少し長く取ってほしいと思った。

### § 3. 懇親会とその後

\* 〒100-8959 千代田区霞が関 3-2-2  
電子メール: stara@bunka.go.jp

musha や著書・論文だけで存じていた方々と懇親会の席で杯を交わして話し合う機会ができたことも、研究会参加の大きな収穫である。Eメールを通じて意見の交換をした方が何人もおられたので、「初めて顔をあわせるのに、旧知である」という「オフラインミーティング」の妙も久しぶりに味わった。新しい分野を切り開いてきただけに個性豊かな方ばかりで、「梁山泊」ということばが思い浮かんだ。多くの参加者が義務や義理でなく、率直に議論に参加しようという気持ちで会に臨んでいたためであろう、会場では話が尽きなかつた。

翌日の午後、会場を辞して、列車が来るまで少し時間があったので、せっかくここまで来たのだから象潟を見てこようとタクシーで一回りしてみた。昔の島々が点在する一面の田んぼと鳥海山の広大な山裾の取り合せは、さすがに日本を代表する自然景観で、目を奪われた。

東京に帰ってみると、「『歴史地震』の編集担当になつてください」というEメールが追いかけてきた。おもいがけない話だったが、異なつた専門分野の発想に基づく論文を読ませていただくのもよい機会と思い、お引き受けした。

今回は2日間だけの参加だったが、たいへん充実した時間を過ごすことができた。会の運営に当たったスタッフのみなさんの御努力に感謝したい。